

## 第9講:「元の理」と異文化理解

天理大学国際学部教授  
森 洋明 Yomei Mori

「元の理」は、教祖が当時の信者に対して語った内容を書き留めたものである。その冒頭は「この世の元初まりは、どろ海であつた」に始まり、無から人間世界が創造されたという壮大な創造論を示している。ここでいう「どろ海」とは「混沌たる様」であり、また「紋型ない」とも説明されている(『天理教事典 第三版』)。すなわち、秩序や形態を欠いた「無」の状態を指す概念である。このような何らの秩序も存在しない状態から、自然環境を含む秩序ある人間世界が創造されたのである。

「紋型」は「紋型ない」という表現において用いられ、完全に姿形を欠き、印や型も存在しないこと、さらには抛るべき手本や原型が存在しないことを意味する(同書)。『天理教教典』第4章には「紋型ないところから、人間世界を造り」(36頁)と記されており、人間世界の創造に際して、親神は何ら具体的な形象や参照すべき模型を持たない状態から創造を行ったと説明されている。

何も存在しない状態から何かを創出するという、従来明かされてこなかった内容を人間に説示するためには、言語化が不可欠となる。とりわけ、それが人々にとって未知であり、いわば「最後の教え」とも位置づけられるものであるならば、従来用いられてこなかった、あるいは新たに創出された表現が用いられることもあり得るだろうが、新たな表現ばかりでは教えの内容は十分に伝達されない。

この点、教祖は「ひながた」を通じ元の神の存在やその教えを、当時の大和国庄屋敷村およびその周辺に暮らす人々に理解しやすい形で明かされた。そのため、当時の人々が具体的に想像しやすく、すでに社会の中で共有されていた表現が多用されたのである。「ほこり」「つとめ」「ひのきしん」「肥」「田地」などは当時の生活で使用される表現であり、既存の語彙として人々に広く理解されていた言葉である。また、「みかぐらうた」が数え歌の形式を採っていることや、「おふでさき」が和歌体で記されていることも、当時の人々にとって理解しやすく、かつ親しみやすい表現様式を選択した結果であろう。これらは、教えを一方向的に示すのではなく、受け手の理解を重視した親神の意図、すなわち「親心」の反映であると言えるだろう。

この「元の理」も同様で、「どろ海」だけでなく、そこに登場する生き物である「どちよ、うを、み、しやち、かめ、うなぎ、かれい、くろぐつな、ふぐ」などは、いずれも当時の人々にとって日常的に馴染みのある存在であった。人々が具体的なイメージを容易に想起できる生き物だった。たとえば「くろぐつな」は、現代日本語においては一般的に用いられない語であり、その意味を直ちに理解することは難しい。しかし、「くろぐつな」は、近年まで関西地方では蛇の別称として用いられてきた語である(佐藤孝則『グローカル天理』2017年4月号)。

さらに、「元の理」で用いられるこれらの生き物には、それぞれ固有の機能が付与されている。それらの機能は、人間の身体内部における守護の働きを象徴するものであると同時に、世

界における自然の守護機能とも相互に呼応する構造を有している。こうした守護の体系を具体的に理解させるために、身近な存在を喩えとして用い言語化して示したものが「元の理」であると位置づけることができよう。

そもそも何も存在しない状態に秩序を構築していくためには、対象を細分化し、分類する必要がある。それは同時にそれぞれを他と区別することでもある以上、単語で分けることが不可欠である。しかし、全く新たに未知の語彙のみでは、理解は容易ではない。そのため、「元の理」においては身近な存在が取り上げられ、さらにそれぞれの生き物がもつ特性を踏まえたうえで語られている。言語によって語られている以上、「元の理」そのものが、多様な「分類」によって構成された体系であるとも言えよう。

「元の理」によれば、人間世界は「陽気ぐらし」という壮大な意図のもとに創造されたとされる。しかし、神によって創造された人類の歴史を展望すると、そこには数多くの「分断」が生じてきたことが分かる。肌の色や体格、言語などによって人種という概念が生まれ、人類が分類されることになった。肌の色による区別は約400年にわたるアフリカ人奴隷貿易の要因ともなり、今日に至るまで多くの差別を生み出している。現代社会においても、国家という枠組みによる分断に加え、職業や社会的地位、さまざまな立場による区別が存在する。また日常生活においても、星座や干支、各種性格診断などを通じて私たちは自発的に分類を行っている。社会生活を営む上で、こうした区別や分類は必要不可欠であろう。しかし一方で、それらはしばしば分断を生み、対立や争いの要因ともなってきた。人類史における人種間・国家間の戦争は、人類が行ってきた分断の結果である。人間の救済を標榜する宗教でさえ、歴史の過程において多くの分断を生み、流血を伴う争いをもたらしてきた。

世界の秩序を維持する上で、社会の中に存在するさまざまな分断が完全に消滅することはないであろうが、この「元の理」は人間の分断、社会の分断、そしてそれらから生じる衝突や紛争を超越する人間観・世界観を提示している。人間身の内における守護は、全人類に共通する教えであり、そこには国や言語、人種、文化といった差異による分断は生じない。すなわち、さまざまな分断を超越する神の守護が説かれているのである。自然環境における守護の実相も、この身の内の守護と呼応しており、人間のみならずすべての動植物が享受する神の守護なのである。そしてこれこそが「天の理」なのである。

「元の理」において語られる創造の諸過程は、現代世界の構造を根底で支える「天の理」に至るまでの、神の長い守護の歴史を示すものである。そして、その抽象的な理を、具体的に理解しやすい生き物や神名を用いて明らかにした点に、「元の理」の大きな特徴がある。したがって、「元の理」は、地域・社会・文化の差異を超えた神の守護の世界を説く教えであり、「せかいたすけ」を掲げる天理教において根幹をなす教義であると位置づけられる。さらに異文化理解という視点においても、その根底ともなる教えであるとも言えよう。